遺伝子組み換え 外国企業独占 阻止するには賢い消費者に

日本の農業の安全と農林業の未来への提言

第7回日本の農業と食のシンポジウム 京都で種子が大事をテーマに盛大に開催

自然農の重要を学ぶ

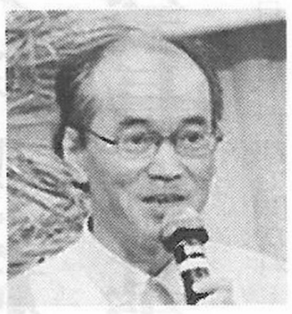
豊受自然農の活動を紹介

満員となったシンポジウム

第7回日本の農業と食のシンポジウムが5月13日午前10時から京都・京都リサーチパークにおいて「種子が大事―日本の食の安全と、農林業の未来への提言　Public Seed　種は皆のもの―」をテーマとして盛大に開催された。今年で7回目の開催となるが年々、来場者は増え、今回初めて参加した人々も多く、「食に重要性、特に普段、意識していなかったことに気付いた。自然農法で作った農産物を口にすることの重要性が分かった」と語り、会場に販売していた米や野菜等を買い求めていた。発表内容は盛り沢山で参加者にとって充実した一日になったと喜ぶ姿があちこちで見受けられた。今回のシンポジウム由井寅子大会長の基調講演など一部のプログラムは豊受チャンネルでYOUTUBEでライブ配信された。

講演する杉田かおるさん

開会は全員立ち上がり国歌「君が代」を斉唱、由井寅子大会長の挨拶で始まり、農業を始めた理由の一つとして、ホメオパシーの相談会で、アトピーや電磁波過敏症のクライアントさんなどの難病の方々の病気の背景には食の問題があったこと、ホメオパシーだけでなく食を自然なものに変えることで大きく改善が見られ、食の大切さが分かったため多くの患者さんらを助けるために自然農を実践しようと決めたと語った。



最初の来賓講演は、日本の種子（たね）を守る会事務局アドバイザーの印鑰智哉さん。「種子をめぐる世界の動きと日本」をタイトルで、私たちの食が危機に瀕している。もう一度原点に戻る必要があるとして、この地球は微生物の星であり、微生物と植物の共同作業で豊かな土壌が地球に育まれ変わったこと。しかし、戦後、化学兵器の技術が民間転用され、化学肥料と農薬が登場。一時的に生産性は上げるかにみえたものの、長期的には土壌を破壊し続けており、このままではあと60年で世界の土壌が失われ、地表に岩石だけが残る星になると科学的な試算を出している現状などが伝えられました。

この大きな原因のひとつとして、農薬、化学肥料にあると指摘。戦後、化学肥料と農薬、種子を3つにセットして売り込む工業型農業が広がり、1996年以降の第2次「緑の革命」から遺伝子組換え農業が始まった事。米国で遺伝子組換えされた作物に特許が認めた歴史的経緯。種子・農薬市場の独占化の動き。さらに「モンサント法案」と呼ばれ、世界の農家から種子を取り上げ、種子を保存したり、共有することを犯罪とし、毎回種子企業から買わせる法案、それを強いるUPOV1991年条約に触れ、このモンサント法案がラテンアメリカで、農民とグローバル種子企業の間で大きな対立を引き起こしたこと。日本では、既に1998年にUPOV1991年条約を批准し、今回も種苗法を改正されたことから、このまま見過ごせば自家採種を禁止する流れにあることを警告。自家採種できる種子を守っていくことの重要性を訴えた。

アメリカでは遺伝子組換え作物の普及と共に、糖尿病や自閉症、セリアリック病などが急増しており、健康リスクについての注意喚起もなされているなどを語った。

続いて女優の杉田かおるさんの発表。自然農の縁でとらこ先生、豊受自然農との出逢い、そして種子を守る活動につながったいったご自身の感動的なエピソードを披露。

松尾さんが亡くなられて、杉田さん自身、自然農をどう取り組んでいこうかと悩んでいた時に、とらこ先生と出逢い、豊受自然農で、種をとる自然型農業をやっていることを知ってすごく嬉しく感じられたそうだ。

山形で有名な紅花

また杉田さん自身、何か種子を守ることに貢献できないかなと思っていて、山形の伝統の野菜を守る「よみがえりのレシピ」という映画をみて、種子を守る山形の農家やシェフのお話にとても感動され、映画に出ていた山形大学の在来種研究会の江頭先生に会いに行った際に、映画で紹介されていた殿島きゅうりの農家さんの畑を見学させていただいた時に、農家さんに「この2列つくっているのは、何という作物ですか」と聞いたら、「これは山形で有名な紅花なんですが、今つくられているものは改良されてしまっていて、私がつくっているのは最上紅花と言って古くから伝わる在来種で、つくっている農家さんはほとんどいらっしゃらないんです」と言われまして、これは貴重な紅花なんでぜひとらこ先生の紹介したいと思われ、その農家さんに「とら子先生に紹介してもいいですか」と聞かれたそうです。そうしたら、農家の方が、これからも作ってくれる人を探していて、「私の後にはもうつくる人がいないんではと思っていたので」、ということでたくさん種を分けて頂ました。聖徳太子の頃から続いている種子なので、なんとか形にならないかと思っていたら、豊受自然農の畑で栽培され、今後、最上紅花を使った口紅とファンデーションが、色も天然で体にも優しい自然化粧品として販売されることになったことを紹介され、会場からも拍手が起きました。また、松尾さんは、「問いを生きないで答えを生きなさい」と杉田さんに教えてくれたそうだ。「なんでこうなの？なんでこんなに遺伝子組換え増えてしまったの？」理不尽なこと、質問したいといっぱいあるのですが、自分ができるのはなんだろうという原点にかえったら答えが見えてきて、答えを生きることが一日一日充実していきることだと感じていています。」と。最後に、杉田かおるさんは、今年は母を看取り、命を考えたり、学んだり。豊受自然農の皆さんにお会いして、勉強させてもらえること感謝しとらこ先生へのお礼で話を締めくくられました。

北海道・洞爺農場のリーダー、米丸輝久さんは、自然な種を使ってどのようなサイクルで栽培を行っているか、一年を通じた活動の様子を映像で紹介し、皆で日本の自然な種子を守っていくために、家庭菜園などの種子の入手方法なども紹介し、その地の土や気候に合わせて種子が、自家採種で、その土地に合った固定種へと育っていくプロセスを紹介するなど、自家採種のコツを紹介し小さな規模でも自家採種に取り組むことを勧めた。

丘の斜面の原野を一から開拓して始まった洞爺農場の活動も10年を超え、今や一年草、多年草、ジャガイモ、自生の植物など、ハーブ類を中心に多くの植物が育つようになっている。洞爺農場は平均気温が低く、1年のうち3か月間は雪に閉ざされ、農繁期は4か月ほどしかないという。農業には厳しい条件ながら、温室を利用した育苗など植物に合わせた細やかな工夫を重ねて徐々に収量を上げてきた。

「自家採種を何年も続けていくことで植物自身がその土地に適応していく」と米丸さん。厳しい自然環境での栽培は当初はまったくうまくいかなかったそうだが、それでも何とか取れた種を翌年蒔くことを年々繰り返すうち、だんだんと良い作物がとれるようになったという。

良い種を選んでおくと、その性質が次世代に引き継がれ、土地に適応した良い作物を実らせるようになる。これは年月をかけた体験がもたらしてくれた智恵。周りからは「野菜を作っているのに食べずに種を取るだけ？」などと言われながらも地道に続けた取り組みが、まさに実を結びました。米丸氏はまた「固定種には個性があって、まったく同じ育て方をしていても味や形に違いが出る」とも。固定種のスイカには、甘さだけではない、なんともさわやかな美味しさがあって、数値ではあらわせないその風味こそ固定種の魅力だといいます。「農薬や化学肥料を使わなければ作物が育たないというのは、そういうものの助けを借りなければ育たない植物を育てているから」「自家採種のよいところは、自然に逆らうのではなく、自然に淘汰されながら植物自身が自らの力で環境に順応していこうとするところ。これこそが環境に害のない持続可能な農業」と語った。

続いて静岡県函南の六本松農場の農業部リーダーである吉田誠さんから遺伝子組換えはもちろんF1種などの不自然な種は使わず、在来種、自然な種での自家採種、さらにくぬぎ落ち葉発酵堆肥など土づくりを重視した自然型農業で主要穀類（米、小麦、大麦、はと麦、大豆）、野菜、果樹、ハーブなど100種類以上の農産物の栽培、また食品加工、化粧品加工、グループ内での農場の農産物をメインにつかった自然食レストラン展開や店舗、インターネットモール通販、イベント開催など、グループあげて六次産業化に取り組む六本松農場の活動について紹介された。

3面につづく